

四年制大学における介護福祉士養成課程の位置づけを考える ～東京都キャリア形成訪問指導事業への参加を通して～

白梅学園大学 子ども学部 家族・地域支援学科
関谷 栄子・西方 規恵・森山 千賀子
同 実習指導センター実習講師 (2010年度)
古川 潤子
白梅学園短期大学 福祉援助学科
土川 洋子

1. 事業への参加の経緯

2010 (H22) 年度、東京都は「キャリア形成訪問指導事業 (以下訪問指導事業) (21 福保生地第 1640 号)」を実施した。これは、社会福祉士、介護福祉士及び精神保健福祉士の養成施設 (以下「養成施設」) の教員が、福祉・介護施設・事業所 (以下「事業所」) を巡回・訪問し、介護技術等に関する研修を行うことにより、職員のキャリアアップや資質の向上及び定着を支援することを目的とした事業である。

白梅学園大学 子ども学部 家族・地域支援学科 (以下「本学」) では、この事業に対し、研修を通じて、事業所の実態を直接ヒアリングし、本学における介護福祉士養成のあり方を考える機会ととらえ、また、本事業を通じて、直接的な事業所支援を行うことでの社会的貢献の機会であるともとらえて受託、実施した。本学の各介護教員 5 名の専門性に応じたテーマに即して、研修を行い、都内の 38 か所の事業所において、訪問指導事業を実施した。

私たちの訪問指導が、介護現場のボトムアップにどこまで、そしてどのように貢献できたかを評価する指標は現在のところ持ち合わせていないが、各事業所に訪問し介護職員と出会い、講義を行うことを通して多くの知見や学びを得ることができた。ここではその内容について報告するとともに、そこから考えられる四年制大学における介

護福祉士養成課程の位置づけの考察を試みた。

2. 事業内容

本事業は、東京都障害者自立支援対策臨時特例基金条例 (平成 19 年 2 月 28 日東京都条例第 5 号) に基づき設置された東京都障害者自立支援対策臨時特例基金を活用して行う事業として、職員のキャリアアップや資質の向上及び定着を支援することを目的として実施された。

本学ではこの訪問指導事業への参加を通じて、①教員個々の研究領域に関する事業所の実態を直接ヒアリングし、把握する②事業を通じて、直接社会的貢献に寄与することを目的とし、それらから四年制大学における介護福祉士養成課程の位置づけを考える機会とした。

3. 実施概要

東京都の募集に対し、本事業に参加した養成施設は、6 校 (7 部門) であった (表 1)。

事業所に対する募集は、東京都福祉人材センター (以下「人材センター」) が仲介し、集約して養成校とのコーディネートを図った。人材センターの報告は未発表であるが、のべおよそ 1200 事業所からの依頼があったとのことである。

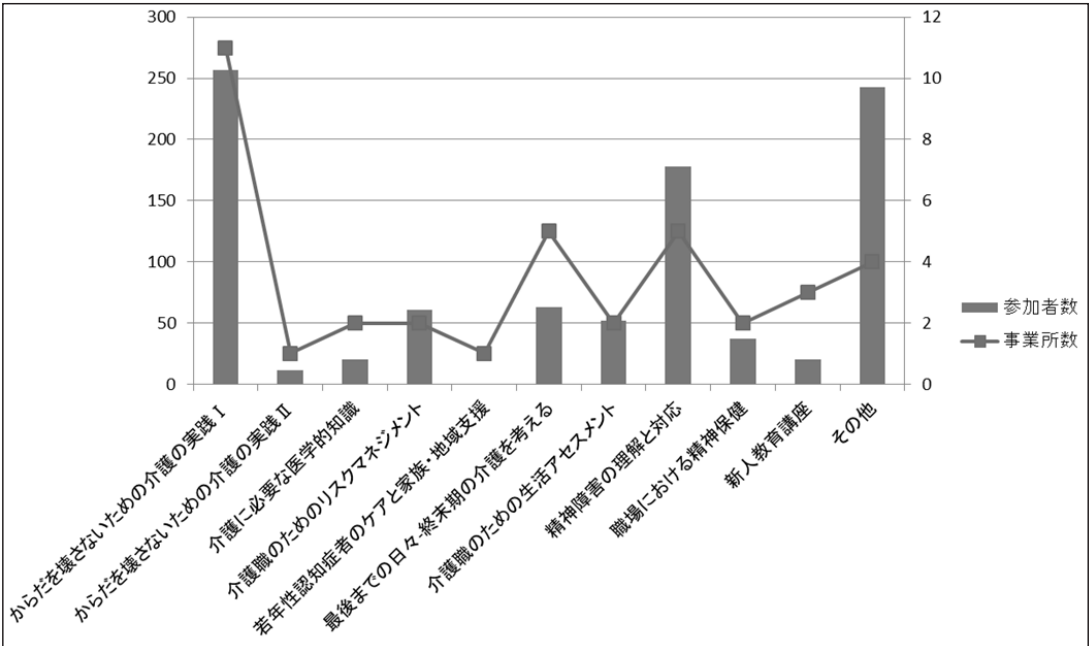
本学では、人材センターのコーディネートを受けて、のべ 38 事業所 (すべて介護、通所、訪問および入所)、13 テーマ (個別に設定したテーマ

も含む), 研修受講生はのべ 804 名だった (図 1)。

この事業の実施報告は人材センターへなされるため, 受講生への直接的な本学独自の調査・集計

は行っていない。各教員が実施した研修内容についての一部を紹介する。

図 1 平成 22 年度東京都キャリア形成訪問指導事業研修テーマ別参加者数(本学)



① 介護職のためのリスクマネジメント

○研修目的, 習得目標

1. 介護福祉サービスにおけるリスクマネジメントの導入の目的を理解する。
2. リスクマネジメントの取り組み方法を理解する。
3. リスク回避のための基本姿勢と援助技術を学ぶ。

○施設・事業所の研修希望の把握方法

企画調整室の担当者を経由して施設・事業所担当者と日程調整を, 研修の 1 ヶ月前には研修日程を確定した。その後の研修内容, 必要物品等の詳細の打合せは, 施設・事業所の担当者と研修講師との間で FAX を用いて数回行った。

○研修内容

1. リスクマネジメントの基本理念, 福祉・介護福祉サービスにおけるリスクマネジメント (講義)
2. リスク回避のための基本姿勢と援助技術 (グ

ループによる事例検討)

3. 介護職の安全管理と, 心身の健康管理, まとめ

○講義方法: 1 回 2 時間程度

- 講師の講義 (約 1 時間)
- グループ演習 (約 30 分)
- 講師のまとめ (約 30 分)

○研修資料

講師の方で作成 (36 頁)

② 介護職のための生活アセスメント

○研修目的, 習得目標

1. 介護職が行うアセスメントの特徴を理解する。
2. グループ演習を通じて, 生活アセスメントの視点・考え方を学ぶ。

○施設・事業所の研修希望の把握方法

企画調整室の担当者を経由して施設・事業所担当者と日程調整を, 研修の 1 ヶ月前には研修

日程を確定した。その後の研修内容、必要物品等の詳細の打合せは、施設・事業所の担当者と研修講師との間で電話連絡を行った。

○研修内容

1. 介護を必要とする人の生活の理解—その視点と方法（講義）
2. 介護の展開過程における生活アセスメントとは（講義）
3. 「ニーズ」と「デマンド」の違い（グループワーク）
4. まとめ、質疑応答

○講義方法：1回2時間程度

講師の講義（約70時間）

グループ演習（約20分）

まとめ・質疑応答（約30分）

○研修資料

講師の方で作成（23頁）

③ 最後までの日々—終末期の介護を考える—

○研修目的、習得目標

1. 介護職に必要な終末期ケアの知識を理解する。
2. がん患者と高齢者の終末期ケアの違いと共通点。
3. 施設における終末期ケアはどのように進めるか。（事例で学ぶ）

○施設・事業所の研修希望の把握方法

企画調整室の担当者を経由して施設・事業所担当者と日程調整

研修の1ヵ月前には研修日程を確定した。その後の研修内容、必要物品等の詳細の打合せは、施設・事業所の担当者と研修講師との間で電話連絡を行った。

○講義方法：1回2時間程度

講師の講義（約90分）

まとめ・質疑応答（約30分）

○研修資料 講師が作成（31ページ）

○研修内容

・終末期ケアについては、がん患者のスピリチュアルケア、緩和ケアなどを応用して老人ケア

の看取りケアとして応用する。

- ・本人の意思確認
- ・終末期ケア技術
- ・遺体へのケア技術（エンゼルケアの実際）
- ・家族（遺族）へのねぎらい
- ・地域のネットワークを活用，医療連携，災害時

○質疑

- ・当事者に意思確認できない場合はどうするか
- ・地域の医師との協力連携のしかた
- ・終末期の個別対応とチームケア

④ からだを壊さないための介護の実践

○研修目的、習得目標

介護の職場で多い腰痛について，その予防対策について知り，一つの方法を学ぶ。

○施設・事業所の研修要望の把握方法

研修講師が，研修実施1ヶ月前に施設・事業所の担当者と連絡を取り，研修日程，内容を確認した。その後，施設などを訪問（又は電話など）し，施設の要望，研修内容（移動・移乗の方法，使用物品など）を確認した。

○研修内容

1. 講義：①腰痛を起こさないためには，②利用者を持ち上げない移動・移乗の考え方と具体的な方法（ペア・ハルボール・ルンデ（P.H.L）システムを紹介）
2. デモストレーション
3. 受講者の演習
4. まとめ、質疑応答（日頃，移動介助について困っている事例について含む）

○研修資料 講義内容，研修用テキストを作成し，配布した。

⑤ 精神障害の理解と対応

○研修目的、習得目標

精神疾患，精神障害の特性を理解する，精神障害者ホームヘルプサービスの必要性を理解す

る、精神障害者の援助技術・方法を理解する。

○施設・事業所の研修要望の把握方法

研修講師が研修実施1カ月前に施設・事業所を訪問し、1時間程度、研修内容の打合せをして要望を把握する。

その他、必要に応じて、電話およびE-mailにて連絡をとる。

○研修内容

1. 精神疾患、精神障害の特性
2. ホームヘルプサービスの必要性
3. 精神障害者の援助技術・援助方法

○研修資料 講義内容レジュメ（別途）配布

⑥ 職場における精神保健

○研修の目的・習得目標

1. 精神保健の理解
2. 職場における精神保健
3. 職場における精神保健の保持・増進の具体的方法

○施設・事業所の研修要望の把握方法

研修講師が研修実施1カ月前に施設・事業所を訪問し、1時間程度、研修内容の打合せをして要望を把握する。

その他、必要に応じて、電話およびE-mailにて連絡をとる。

○研修内容

1. 精神保健とは
2. 職場における精神保健の実際
3. 職場における精神保健の実践

○研修資料 講義内容レジュメ（別途）配布

事業所および本学教員は、直接丁寧に日程調整を行っており、お互いの状況から都合の良い3月下旬に予定していた6か所の研修が、東日本震災の影響を受け、中止となった。中止がなければ、受講生の述べ参加数は、1000名を超えたものと思われる。

表 1-1 平成 22 年度東京都キャリア形成訪問指導事業研修等プログラム一覧

平成22年度キャリア形成訪問指導事業研修等プログラム一覧表

I. 養成施設による研修プログラム

養成施設名	領域・学科	No.	科目名	研修等内容	対象者	時間数	時期・曜日・時間	対象地域
学校法人緑陽理工学園 実践理工医療福祉専門学校 (港区)	介護福祉学科	1	介護記録	介護記録の意義と書き方学ぶ	初任者から中堅介護職員	120分	22年3月までの間で応相談	都内 (島しょは除く)
	介護福祉学科	2	コミュニケーション	介護に必要なコミュニケーション能力を高める	初任者から中堅介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	都内 (島しょは除く)
	介護福祉学科	3	認知症	認知症の理解と介護実践を学ぶ	初任者から中堅介護職員	120分	22年3月までの間で応相談	都内 (島しょは除く)
学校法人東都医療福祉学院 千住介護福祉専門学校 (足立区)	介護福祉学科	4	リフトを使用した移乗介助	リフトを使用した移乗介助技術の習得	介護職員	150分×3回	22年3月までの間で応相談	足立区・葛飾区・墨田区
	介護福祉学科介護福祉士コース	5	シリーズ1:介護の基本1	高齢者の陥りやすい病気と対策	介護職員	90分	22年2月中で応相談(シリーズについてはセットでも単体でも可能)	応相談
学校法人緑陽学園 日南福祉三業福祉専門学校 (三鷹市)	介護福祉学科介護福祉士コース	6	シリーズ2:介護の基本2	簡単にできる介護食	介護職員	90分	22年2月中で応相談(シリーズについてはセットでも単体でも可能)	応相談
	介護福祉学科介護福祉士コース	7	シリーズ3:介護の基本1	少しの工夫で楽・らく介護	介護職員	90分	22年2月中で応相談(シリーズについてはセットでも単体でも可能)	応相談
	介護福祉学科介護福祉士コース	8	シリーズ4:介護の基本2	自立支援に向けた介護技術	介護職員	90分	22年2月中で応相談(シリーズについてはセットでも単体でも可能)	応相談
	介護福祉学科介護福祉士コース	9	シリーズ5:IT活用技術	介護職員のためのパソコン教室	介護職員	90分	22年2月中で応相談(シリーズについてはセットでも単体でも可能)	応相談
学校法人上智学院 上智社会福祉専門学校 (千代田区)	介護福祉士養成課程	10	福祉サービスに必要な生活支援の視点	福祉・介護サービスに従事する職員が持つおくべき基本視点を確認するための研修	初任者から中堅職員	90分	22年3月末日迄 午後6時30分から8時まで(応相談)	応相談
	介護福祉士養成課程	11	福祉・介護の実践と地域ネットワーク	事業所の中だけでなく、地域にある多様な資源や組織とのつながりが形成し、連携していくための研修	初任者から中堅職員及び管理職	90分	22年3月末日迄 午後6時30分から8時まで(応相談)	応相談
	介護福祉士養成課程	12	介護保険制度の理解	外国人労働者が現行介護保険制度を理解するための研修	外国人介護従事者	90分	22年3月末日迄 午後6時30分から8時まで(応相談)	応相談
	介護福祉士養成課程	13	日常会話・高齢者の言葉の理解	外国人労働者が高齢者とのコミュニケーションをスムーズに行うための研修	外国人介護従事者	90分	22年3月末日迄 午後6時30分から8時まで(応相談)	応相談
	介護福祉士養成課程	14	介護記録の書き方	1 POS方式とは 2 介護記録とPOS 3 POSを用いた介護記録の方法	介護職員	90分	22年2月末日迄 午後6時30分から8時まで(応相談)	国庁自衛隊から片道1時間前後後の施設
	介護福祉士養成課程	15	難症病を持つ利用者の介護	1 難症病の急性合併症と慢性合併症 2 日常生活の留意点	介護職員	90分	22年2月末日迄 午後6時30分から8時まで(応相談)	国庁自衛隊から片道1時間前後後の施設
学校法人目白学園 目白大学 (新宿区)	人間福祉学科	17	実践的コミュニケーション技能	基本的共感と深い共感技法を身につける(演習)	介護職員	120分	22年3月までの間で応相談	応相談
	人間福祉学科	18	国家試験(筆記)対策	介護技術の試験対策	介護職員	応相談	22年1月までの間で応相談	応相談
	人間福祉学科	19	国家試験(筆記)対策	形態別介護技術の試験対策	介護職員	応相談	22年1月までの間で応相談	応相談

表 1-2 平成 22 年度東京都キャリア形成訪問指導事業研修等プログラム一覧

養成施設名	職種・学科	No.	科目名	研修等内容	対象者	時間数	時期・曜日・時間	対象地域
学校法人白百合園 白百合短期大学部 (新宿区)	生活科学科	20	リスクマネジメント	ヒヤリハットから新卒まで	管理職	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	21	人間関係とコミュニケーション	人に伝えるとは	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	22	人間関係とコミュニケーション	敬語と挨拶の使い方演習	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	23	人間関係とコミュニケーション	コミュニケーションスキルを磨いて専門職として利用者と心を結ぶ	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	24	ご利用者の尊厳を守る	専門職としてのご利用者の尊厳（認知症を例にし）	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	25	認知症とは	認知症の基礎知識と専門職の対応	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	26	対人援助職の専門性	専門職としての価値観と個人の価値観	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	27	介護過程1	介護過程の基本的理解	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	28	介護過程2	介護過程の展開	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	29	セーフティマネジメント	事故の分析方法、事故防止の体制づくりのポイントを学ぶ	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	30	医療の知識	高齢者に多い病気の観察方法	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	31	医学知識と体のしくみ	医療的根拠に基づいたケアの方法	介護職員	120分	23年3月までの間で応相談	応相談
	生活科学科	32	国家試験（実技）対策	国家試験実技テストの対策	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
生活科学科	33	事例検討	モデル事例および実地施設入居者の事例（リハビリテーションを視野に入れて）	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談	
学校法人白鶴学園 白鶴学園大学 (小平市)	家族・地域支援学科	34	からだを壊さないための介護の要諦1	移動動作とボディメカニクスの理解	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	35	からだを壊さないための介護の要諦2	労働環境の改善と法整備の観点	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	36	介護に必要な医学的知識	介護に必要なこととからだのしくみ	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	37	介護職のためのリスクマネジメント	事故の対策、予防、管理	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	38	介護過程理解のための迷いなく	介護過程の考え方の理解と応用	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	39	認知症認知症等のケアと家族・地域支援	認知症・若年型認知症の理解と支援	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	40	最後までの日々〜終末期の介護を考える	終末期介護の理解と実例の紹介	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	41	社会資源の活用・調整とホームヘルプ	在宅介護に必要な社会資源の理解と活用	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	42	介護職のための生活アセスメント	現場でのアセスメントの実践	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	43	精神障害の理解と対応	精神疾患、精神障害の理解と支援	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	44	職場における精神保健	精神保健の基本とその職場での応用	介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
	家族・地域支援学科	45	新人教育講座	介護の基本、接遇、コミュニケーション	新任介護職員	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談
家族・地域支援学科	46	介護保険とケアマネジメント	介護支援専門員に必要な知識	介護業務経験4年以上	応相談	23年3月までの間で応相談	応相談	

4. 考察

現場の実態把握－研修内容が研究活動へどのように役立つか

①介護職のためのリスクマネジメント

福祉・介護サービスが措置制度から契約制度に変化する流れの中で、リスクマネジメントは「利用者の権利を守るしくみ」であることが認識されてきた。またリスク回避の取り組みには経営者のリーダーシップが重要であること、介護職員の安全管理も含め組織的に取り組むべきことであること、さらに、リスク回避に必要な援助技術やコミュニケーション技術を学ぶことは、介護の質の向上、事業所（施設）信用や信頼関係形成につながることを、実践的な研修を通して伝えていくことも我々の役割であると考え。

②介護職のための生活アセスメント

都内の事業所（施設）と言えども、訪問指導に

伺った事業所（施設）が所在する自治体は、3年前にやっと介護福祉士の養成校が出来たばかりの地域であり、介護福祉士を採用したくても応募がないとの話であった。いずれは実務経験ルートも養成校等での480時間研修が課されるが、職場内の職員間みの研修では、進展は難しいと考えられる。介護実践の根幹をなす介護過程の展開、生活アセスメントの考え方を、わかりやすく丁寧に伝えていく必要が養成校の教員には課せられているように思われる。そのための教材づくりなどは、今後の課題として重要である。

③最後までの日々〜終末期の介護を考える〜

高齢者施設において、終末ケアを年間5〜10名体験する。一人一人違う終末ケアの方法は違ってよい。終末時には多彩な介護体験があり、その人その人の終末ケアを考えてみる必要がある。口腔ケア、痰の吸引などの医療的なケアする際には、介護と看護の協力が不可欠であり、特に医療機関との連携が重要である。地域には多様な資源

がある。その資源をできるだけ多くの人と共同して活用すべきである。今後、超高齢化社会が加速する中、人々が満足した人生を全うするために介護職の役割はますます重要となる。こうした一連の終末期介護について、現場の声を吸い上げ、ともに考えていくことが、教育機関にとっても重要である。

④からだを壊さないための介護の実践 I

教員は、日常的に福祉現場で働いているわけではないため、日々変化する現場の様子を知る機会が少なくなりがちである。今回は、直接、施設の様子を知る機会となった。このようなことは、現場と学校との技術に対する考え方、方法などについて意見交換し、交流する可能性が広がるのではないかと考える。

ただ、この研修で全て現場の様子が把握できたとしても、腰痛の予防ができるとも考え難い。技術が定着するには現場の多くの人に支持され、活用される必要がある。そのためには、1回の紹介をする研修ではなく、継続的な関わりが必要と考えられる。

今回、ある施設で、有志が残ってくださり事例を検討した。今後もこのようなことができたらと思う。そうすることで、もっと有効な技術が創造できるのではないかと実感した。

⑤精神障害の理解と対応

精神障害の本態そのものが未知な部分が多いことも手伝い、現在の最新情報を持たずに現場勤務を行い、不安を抱いている職員が多いという実態が見えてきた。具体的にどのような場面で、対応が困難であるのか話を聞くことができた。また、医療関係者との連携が不十分で、助言の窓口がわからないという意見も聞くことができた。

精神障害への対応介護技術は、未だ十分に整理されておらず、個々の経験と判断に基づく対応策や、解決策が求められているのが実態であることを実感した。これからも、具体的な援助場面の現

象事例を収集し、その対応、介護に一貫する共通技術の発見に臨みたい。

⑥職場における精神保健

職場や個人個人の精神保健問題は、介護職のみならず、全世代全国民が有する課題であるが、とりわけ介護施設現場で生じやすい精神保健上の問題点をヒアリングする機会となった。

とくに、不規則勤務、長時間勤務による強制的昼夜逆転によるサーカディアンリズムの変調、職場内にみられる精神障害に対する知識、認識の差による誤解、偏見といった問題は喫緊の課題であると考えられる。

社会的貢献としての取り組み

講義の際に、「Aさんの薬が、Bさんの配膳トレイの上にあった。」これはヒヤリハットか介護事故かという質問をしたところ、9割の方が「ヒヤリハット」だと回答する場面があった。飲まなければ事故ではないという認識が介護福祉の現場にはあり、リスク回避への考え方の甘さを痛感させられた一場面であった。リスクマネジメントの考え方を、改めて丁寧に伝えていく必要があることを学ぶことができた。また、グループワークにおいては、4～5名に別れて話し合ってもらったなかで、利用者が転倒に至った原因については、コミュニケーション不足、観察不足、事前準備不足などが出され、また具体的な防止策においてもコミュニケーションの重要性や、予測することの必要性、具体的にこんな方法があるなどの意見が出された。グループについては参加者全体で防止策・対応策の共有が、少しではあるが図られたのではないかと考える。講義の後の感想では、「1日に5分程度でも良いので、事例を用いて対策を話しあい、共有する場づくりが必要」等の内容が記され、各事業所（現場）は、具体的なちょっとしたヒントの提供を待っているということを知ることができた。

福祉・介護サービスが措置制度から契約制度に変化する流れの中で、リスクマネジメントは「利用者の権利を守るしくみ」であることが認識されてきた。またリスク回避の取り組みには経営者のリーダーシップが重要であること、介護職員の安全管理も含め組織的に取り組むべきことであること、さらに、リスク回避に必要な援助技術やコミュニケーション技術を学ぶことは、介護の質の向上、事業所（施設）信用や信頼関係形成につながるなどを、実践的な研修を通して伝えていくことも我々の役目であると考えます。

訪問指導に伺うと、「幾つも応募してやっと来て頂けた。」また、「外部に出かける研修は職員にとって負担なので、このように訪問して頂くとお助かります。」などの言葉を頂戴した。研修内容についての反省点は多々あるが、実際に訪問することで介護現場の負担を最小限にとどめ、施設ごとの最大数、多数の受講参加が可能である点では有効な方法であったと考えられる。

現在の介護現場で働く職員の属性は多様で、養成課程を経て介護福祉士資格を有する割合は1/4以下である。人員不足と需要の急激な拡大により、介護現場における介護そのものの質を担保する努力が急務になっている。そこで、東京都は今回のような事業により、ボトムアップを効率的に図る策をとっている。

東京都福祉人材センターが仲介し、養成校の研修可能なテーマと事業所をマッチングしたため、その経緯や数値化されたデータは人材センターが管理している。どのような経緯でこれらの事業所と本学をマッチングしたのかについての報告はまだ受けていないが、比較的本学近隣の多摩地区の事業所が多かった。本学の近隣にあるものの、訪問する機会がなかった事業所へ向う機会を得たことは、教育機関と現場をつなぐ、ひとつのきっかけになったと考えられる。これを機に、今後もお互い協力していこうという気運が高まった。

キャリア形成訪問指導事業に見る四年制大学介護

福祉士養成課程の位置づけ

今回の研修で我々が取り上げたテーマは、本学教員が現在の研究テーマとしている内容を中心に組み立てた。したがって、介護福祉士養成課程における教育内容の中の相当する部分が多岐に渡っている。

介護の現場は、予想通り、多様な職員で成り立っており、とりわけ、通所（訪問）事業に従事している研修参加介護職員の平均年齢は高い印象であった。また、年齢と介護職経験年数が比例しているとは限らず、教育背景も多種多様である様子であった。

周知のとおり、図2のように、我が国は高齢化の一途をたどり、生産人口が減少し続けている。その中において、介護が必要となる人口は増加していくことが必至であり、介護職員の絶対数の増加も不可欠となる。生産人口が減少する中で、介護の質を維持しつつ、絶対数を増加させるという、相反する問題を抱えている。

厚労省の介護サービス施設・事業所調査（H20年）によると、介護従事者はH12年の54万人から平成17年には112万人と倍増しているものの、その中で介護福祉士資格を取得者の割合は約23%と横ばいである（図3）。また、介護福祉士資格取得者数はのべ89.8万人に上るが、現在その中で介護に従事するものは26.5万人にとどまり、60万人以上の潜在的介護資格者がいるという現状である（図4）。

介護福祉士の取得の方法でみると、H22年度、介護福祉士総数99.8万人のうち、介護福祉士国家試験受験による資格取得が63.2万人で、養成課程修了による取得者数26.5万人と全体の3割程度でしかない。一方で、四年制大学で介護福祉士養成課程をもつ大学は、全国64学科に増加傾向にある（介護福祉士養成大学連絡協議会）。

介護福祉士養成大学連絡協議会の中で、井上は、介護福祉教育における大学教育の意義として、1. 教養教育による基礎力の修得、2. 多様性

のある介護福祉教育による汎用性や創造能力の育成、3. 介護福祉士資格の社会的評価の必要性、4. リーダー養成・教育研究を担う人材育成、5. 研究・教育の質の確保、6. 地域におけるケア力の醸成であると述べている。

今回の訪問指導事業には多くの事業所が参加希望していた。事業内容から、現場が情報不足であること、しかしながら不足している知識や新しい知識を渴望していることが窺えた。つまり、社会の急速なニーズの高まりに介護教育は追いついていない。教育する側、教育体制も十分とはいえない。四年制大学における介護福祉士養成課程で

は、教育のあり方や方法論も研究する必要がある。

また、リスクマネジメント、終末期、介護技術（生活支援技術）、精神保健といった問題を取り上げてきた、これらの介護に固有の専門性はどこにあるのかについては未だ明確ではない。研修を通して、具体的な知識を現場に還元するのみではなく、その中にどのような介護の専門性を位置づけ説明できるかは、我々の研究活動にかかっている。今回のような研修は、その手掛かりになるエピソードを現場の事例の中からヒアリングできる機会となると考えられる。

図2 我が国の人口の推移

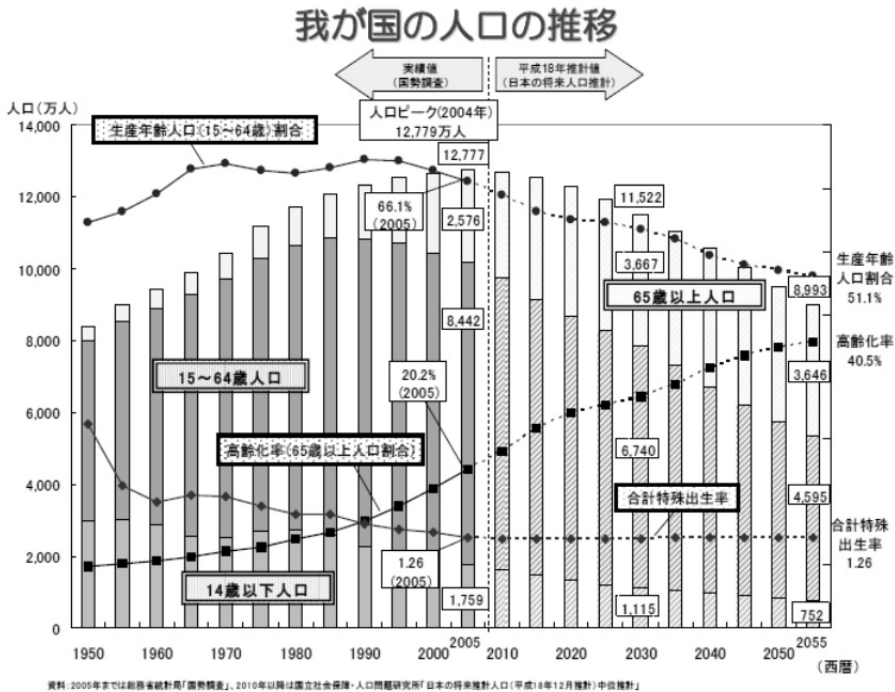


図3 介護職員数の推移と介護福祉士の割合（実人員）

介護職員数の推移と介護福祉士の割合（実人員）

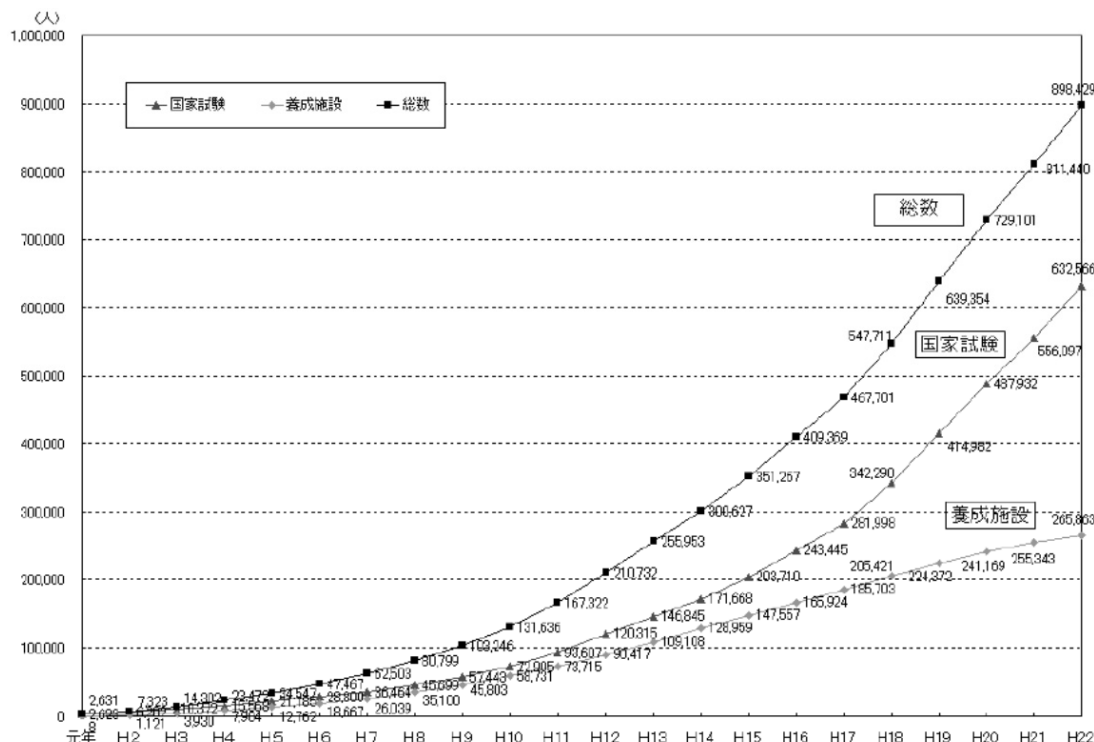
介護職員数は平成12年の約55万人から平成17年の約112万人と約2倍になっており、最近では毎年約10万人ずつ増加している。
また、介護職員に占める介護福祉士の割合は施設で約4割、在宅で約2割で推移している。

	平成12年		平成13年		平成14年		平成15年		平成16年		平成17年	
	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合	実数	割合
合計	548,924		661,588		755,810		884,981		1,002,144		1,124,691	
《介護職員》《介護福祉士数把握可能な施設・サービスのみ》	543,780	24.2%	650,386	24.1%	734,214	24.0%	844,517	23.0%	917,892	23.9%	1,124,691	23.4%
うち介護福祉士数	131,554		156,436		176,257		194,567		219,331		263,048	
施設	236,213	31.7%	253,951	34.2%	265,560	35.2%	281,478	36.0%	298,141	37.1%	312,369	38.1%
うち介護福祉士数	74,863		86,774		93,573		101,412		110,498		118,930	
在宅サービス (※)	307,567	18.4%	396,435	17.6%	488,654	17.6%	563,039	16.5%	619,751	17.6%	812,322	17.7%
うち介護福祉士数	56,691		69,662		82,684		93,155		108,833		144,118	

(※)平成16年以前は「認知症対応型共同生活介護」及び「特定施設入居者生活介護」の介護福祉士数が不明であるため、「在宅サービス」欄の介護職員数には、この2種類のサービスの介護職員数は含めていない。

資料出所：「介護サービス施設・事業所調査」(厚生労働省大臣官房統計情報部)

図4 介護福祉士資格取得者数（厚労省）



5. おわりに

本学における介護福祉士養成は、1989（H1）年から始まっているものの、四年制大学における養成は、現在2年目を迎えたばかりである。

四年制大学教育の中にあつて、広く教養を深めつつ、介護の専門性を考え、構築していく立場にあると考えている。一方、介護福祉士の実践は、現場があつて初めて成立するものであり、専門性の探求は、現場を切り離して行えるものではない。したがつて、今回のような、実習といった学生教育の立場とは別の形で、広く様々な事業所と連絡を取り、状況の把握ができるということは、大学にとって重要なことであつた。

これからも、現場実践と研究機関をつなぐ機会となつて、教育の質の確保、向上、地域との連携強化によるケア力向上への足掛かりとしていきたい。多くの事業所の研修に関与して、現場との情報共有を図ることが、さらに教育・研究効果を向上させ、四年制大学での教育を意味あるものに押し上げていくこととなると考える。双方にメリットとなる現場と研究教育機関を結ぶ取組に参加して行きたいと考えている。

6. 参考文献

平成22年度東京都キャリア形成訪問指導事業研修等プログラム一覧

<http://www.tcsw.tvac.or.jp/pdf/kensyusitu/22-jigyousyo-program.pdf>

平成20年介護サービス施設・事業所調査

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/24-20-2.html>

介護福祉士養成大学連絡協議会

http://www.kaigo-university.com/wp/?page_id=3

井上千鶴子：介護福祉教育における大学教育の意義，介護福祉士養成大学連絡協議会

<http://www.kaigo-university.com/wp/?cat=5>